

S-3

『糖尿病対策会議』事業にリンクさせた地域医療連携の推進

松江赤十字病院 糖尿病・内分泌内科

○佐藤 利昭、垣羽 寿昭、永澤 篤司、

山本 公美、吉岡 かおり

当科では平成13年から病院完結型から地域完結型医療への転換を図るべく、血糖コントロール良好者を対象として、紹介後も当科を半年毎に受診する循環型システムでの逆紹介を積極的に進めてきた。その結果、3000名超の患者数は1200名となり、内500名は循環型患者である。血糖が悪化した患者は改善されるまで当科受診に戻しているため、並行して開業医の糖尿病診療レベルが上らない場合、早晚当科外来許容患者数を超えシステム維持が困難となる。その打開策として、平成17年の『日本糖尿病対策推進会議』設立に呼応して設立された『松江地域糖尿病対策会議』の事業策定・実施に当院糖尿病教育チームが深く関わり、病診連携推進と並行して、開業医の糖尿病診療レベル向上を目的とした事業展開をしてきたので報告をする。対策会議は医師会委員、日糖協委員（当科で推薦）、行政（松江市、松江保健所）委員から構成され、平成18年度に地域糖尿病診療の現状分析を行い、平成19年度に診療部門、予防・健診部門、啓発活動部門の3部門からなる体制を作り、糖尿病対策事業を開始した。中核事業は診療部門事業であり、病院糖尿病専門医による開業医対象の勉強会と開業医受診患者を対象とした講演会を年2回ずつ実施した。また、日糖協島根県支部と共催で、世界糖尿病デー「松江城ブルーライトアップイベント」も企画・実施した。平成20年度も同様の事業を継続するとともに、「糖尿病予防キャンペーン西日本地区講演会」への積極的な協力・参加を行った。平成21年度は従来の開業医受診患者を対象とした講演会を郡部に拡大して2地区で実施した。また、糖尿病地域連携パス検討委員会を組織し、当院で準備していた地域連携パスをたたき台として松江地域共通連携パスを作成し、平成22年度から運用を開始する。

S-4

急性期病院における地域活動がスタッフに及ぼす影響

松江赤十字病院 医療社会事業部

○杉谷 朗子、奥 公明

松江赤十字病院は、島根県の東部に位置し地域の基幹病院として急性期医療の役割を担っている。混沌とした医療情勢の中であって、生き残れる病院になるためには地域におけるポジションや役割を正確に知ることが大切である。地域活動を推進し実施することで、スタッフが地域に興味を持ち視野の拡大や向上心、病院や地域での役割を感じることができたので報告する。

2006年8月から、療養型医療機関や介護保険施設、訪問看護ステーションなど連携する施設を訪問する「押しかけ勉強会」を開始している。メンバーは医師、看護師、栄養士など、内容は最新の治療や看護方法を情報提供し、連携先からは当院への要望や医療依存度の高い利用者を支える困難さ等を情報交換している。敷居が高いとされている中核病院から積極的に向き勉強会をすることで地域医療に係る実務者レベルの相互理解が築け、役割分担を再認識し連携の基盤として有用な機会になってきている。さらに、2008年から実施しているピンクリボン運動で、去年は地元新聞販売店の婦人部と共同で商店街の祭りで乳がんの自己検診や相談コーナーをプレストアチームが開催した。一般市民との共同企画、ふれあいの中で、「楽しかった」「入院は患者さんの人生の一部だと実感でき、幅広くみることができるようになった」「使命感やチームでの取り組みがモチベーションになった」などの声が聞かれ、参加スタッフ個々の成長の一助となった。地域活動に参加したスタッフは極一部であるが、地域に興味を持ち、地域のニーズを探索しポジションを認識する機会になっており、チームで活動することで親近感が深まり円滑なチーム医療にもつながっている。地域との「かかわり合い」の中で赤十字病院としてのミッションがより多くのスタッフに感じられるように取り組み、支援していきたい。